木岡哲学対話の会 2023 年 12 月 3 日

〈あいだ〉に立つ

◎第三の問い――戦争はどうすれば止められるか？

Ⅰ　パレスチナ情勢に即して

○当事者の立場――停戦・休戦を受け容れることのできる大義（ロゴス）は、双方に存在しない。「正当防衛」の名目による「報復」の姿勢は、特にイスラエル側に顕著。

○第三者の立場――ロゴス同士の対決・衝突を収拾する上位のロゴスは存在しない。
→ロゴスを楯とする「哲学」の限界
Cf.「世界の哲学者の協働による提言」は、いかにあるべきか？

○唯一の方策――〈あいだ〉を開くこと。中立の第三者が、当事者間の対話に向けた道筋を用意する（仲介役を務める）こと。

Ⅱ　〈あいだ〉を開くために

○当事者ではない第三者、〈私－汝〉に対する〈彼〉が仲介者　⇒「三人対話」へ

○〈彼〉の存在 ―― ①環境ないし公論、および②環境を代表する主体（個人ないし国家）

○風土学の使命 ――「中の論理」を主軸とする〈かたちの論理〉の構築

→課題：①レンマ（非二元論）としての「中の論理」、②「中道」「中庸」の表す〈道のロゴス〉の具体化。
以上、二つの課題に取り組むことによって、〈東西両世界の総合〉に道が開かれる。

[摘要]
・①「戦争とは何か」（概念・定義）、②「戦争はなぜ起こるのか」（原因・理由）につづく、③「戦争はどうすれば止められるか」（当為）というテーマ。シリーズとしては、最終回。
・当事者に働きかける直接的な手段（勧告・提言を含めて）は存在しない。Cf。新聞記者某氏からの質問――「世界の哲学者の協働による提言」をいかに行うか。
・「哲学」には、正否を争うロゴスはあっても、正否を超える観点に立つ流儀はない。そのロゴス一辺倒のあり方を変えないかぎり、「哲学」としての出番はありえない。
　→レンマの立場において、〈あいだ〉を開く風土学
・哲学者というより、まっとうな人間の立場から、取り組むべき課題は一つ、〈あいだ〉に立つこと。具体的には、当事者間の対話に向けた道筋をつくること。
・〈あいだに立つ〉とは、絶対的に中立であること、敵対する当事者のいずれからも等距離であること、を意味する。
・「第三者」は、基本的には「環境」、言い換えれば、世界の空気・風潮を物語る国際世論。Cf.「弁証法的一般者としての世界」（西田）。しかし、環境は口を利かない。環境を代表する人格的主体が、文字どおり「仲介者」として立たなければならない。
・西田の「弁証法」の根柢は、ロゴスではなくレンマ。レンマには、ロゴスによって表現しつくされない意味がある。山内得立によるテトラレンマ（中の論理）は、ロゴス的な論理の〈修正版〉。しかし、それとは異なるもう一つの「中の論理」が必要である。
・「中」の論理ないし思想――１）ロゴス的論理の自己修正版としての「中の論理」。２）レンマとしての〈道の思想〉が表す「中道」「中庸」の理念。１をより完全なものとするには、2 の裏づけがなくてはならない。1 は理論としての〈中〉、２は実践に重心を移した〈中〉。
・〈かたちの論理〉の課題――1 と 2 の相関を具体化すること。

　以上によって、「〈道のロゴス〉試論」以後のテーマが明らかとなった。
　「世界の哲学者の協働」は、「環境」という意味において、無意味とまでは言えない。「世界哲学者会議」による「緊急アピール」というような性格の声明を出すことで、一定の訴求力は生じうる。だが、そこに指導的な性格の「提言」を盛り込むことができるかは、疑わしい。かつて核開発に関与した物理学者が、「パグウオッシュ宣言」を出したようなケースと同列に、今回の戦争に関する共同声明を出すことができるかどうか。